行ゅ五

影が浮っ

月き

はかぶ

波な俺おお は渚の貝になるが、ないうないないないないないないなるという が来るたび酒を飲む。 Ł き海る が酒ならば

に何をされ

る

ば る か 0 h か

空が代か酒さつ 空の頭蓋に酒を注ぐ代わりにお前を 盃にずがにまずを 盃に まみは そうさ俺ぉぇ 0) 脳の

今<sup>き</sup>天ん 日<sub>5</sub>の な は夢。七、地をか く 響 び操 りを を 返れ落ま く 返す過ちを」 連う 第0 巻 まを 」 かき かまい でったよい つもの問い

その身月にも届/ をの身月にも届/ をかっき をかっき をかっき

でくべし ては 酒 墜ちる

とも

觸な盃さ

でマタノオロチ 現れる 関魅魍魎が顔を出す たまった たまった たまった たまった たまった たまった たまった からられる

ŀ

ラ小トラ管を巻くタノオロチ 現れる

h 0) 日ででも 河原の一次では崩れ 日を信じ盃を酌む もいつか 天に着く かけ 盃を酌む は かけ 盃 は

自ずと心開くべしかく愛の多い世をとかく愛の多い世をとかくをあるがながれてはいる。これではいる。これではいる。これではいる。これではいる。これではいる。これではいる。これではいる。これではいる。これではいる。

一日必ず三百杯 わずかに三万六千日にまたとえ百年生きたとて Ē を

井 田 翼 拓 君 君 作曲 作 歌